令和元年度　中１ギャップ解消プログラム開発事業

通学合宿「うずしお交遊塾」　実施報告

１　趣　旨　今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、家庭での親子のふれあう機会の減少、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。
これらの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をすることを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。
また、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、地域の安全・防災について主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。

２　主　催　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立淡路青少年交流の家

３　後　援　南あわじ市教育委員会

４　日　時　令和2年１月１５日（水）～１８日（土）　３泊4日
※高校生リーダーと大学生ボランティアは前泊（１月１４日）して事前研修を実施

５　場　所　国立淡路青少年交流の家

６　対　象　南あわじ市立南淡中学校区小学３～６年生
南あわじ市立三原中学校区小学３～６年生
兵庫県立淡路三原高等学校生及び吉備国際大学生（高校生リーダー、大学生ボランティアとして）

７　参加者　１９名（小学生１７名、高校生２名）

８　スタッフ　国立淡路青少年交流の家職員、兵庫県立淡路三原高等学校生、吉備国際大学生

９　日　程

	16:00 18:00 18:30 20:30 21:00										
1月15日（水）						受付・入所説明・自習	夕食	開塾式 ＜活動Ⅰ＞ みんなで仲良くなろう！ （自己紹介・交流会）	入浴	就寝準備・就寝	
	6:30 6:50 7:20 8:00 16:00 18:00 18:30 20:30 21:00										
1月16日（木）		起床	朝食	各学校へ登校	学　校	交流の家着・自習	夕食	＜活動Ⅱ＞ ３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。	入浴	就寝準備・就寝	
	6:30 6:50 7:20 8:00 16:00 18:00 18:30										
1月17日（金）		起床	朝食	各学校へ登校	学　校	交流の家着・自習	夕食	＜活動Ⅲ＞ 防災サバイバルキャンプを体験してみよう！ ・班のみんなと協力して寝床を作ろう。		班毎に寝床で就寝	
	6:00 7:00 13:00 15:30 15:40 16:00										
1月18日（土）		起床	＜活動Ⅳ＞ サバイバル食を作ろう！ ・班のみんなと火おこしや食事作り（朝食・昼食）に挑戦しよう。			＜活動Ⅴ＞ 防災サバイバルキャンプをふりかえろう！ ・災害時に必要な物や能力について考えよう。			アンケート記入	閉塾式	解散

※高校生リーダー及び大学生ボランティアは、小学生就寝後に「リーダー・ボランティアミーティング」を実施。

１０　内　容

①　前日研修（高校生リーダーと大学生ボランティア）

セッション１では、ボランティアとその役割について考えた。事業のねらいを理解することや、生活指導や安全管理といった役割を果たすことの大切さについて、理解を深めることができた。子どもと触れ合うボランティア活動の経験が無かった高校生は、真剣な表情でメモを取りながら聞いていた。

セッション２では、参加者との交流会の進め方、役割分担などを考えた。ボランティア経験の無い高校生からも、「レクリエーションを担当したい」という意欲的な声が聞かれた。言葉遣いや身振りなど、小学生に対してわかりやすく伝える方法を、先輩である大学生ボランティアが高校生に伝授している場面もあり、経験や知識の豊富な大学生の頼もしさを感じた。

②　１日目　開塾式・活動Ⅰ：　みんなで仲良くなろう！

「開塾式」では、次長から「自分のことは自分でしよう」「規則正しい生活をしよう」といった通学合宿としての目標や、「防災力を身につけよう」という、うずしお交遊塾ならではの目標が提示された。引き続き行われた「活動Ⅰ：みんなで仲良くなろう！」では、お互いのニックネームや意気込みを発表し合ったり、リーダー・ボランティアが計画したレクリエーションを楽しんだりした。三つの活動班に分けたことで初対面同士の交流であったが、時間が進むにつれて交流が深まり、盛り上がった雰囲気のまま、交流会を終えた。その後、ロープワークの練習時間をとった。「巻き結び」と「角縛り」という２種類の方法を教わった参加者たちは、「わからん！」「難しい・・・」と言いながらも真剣に取り組み、次第に「できた！」「もう少しでできるかも！」などの声が聞かれるようになり、最終的に参加者全員が巻き結びを習得することができた。また、参加者同士が自然と集まり、お互いにひもが結べているか確認し合ったり、教え合ったりする姿が印象的であった。

就寝後のリーダー・ボランティアミーティングでは、今日の活動をふりかえり、「レクリエーションの説明がうまくいった。」「小学生にどう声かけすればいいか難しかった。」等、成果と課題を挙げ、次の日に不安を残さないようにした。また、参加者の様子や参加者同士の関わりなどについても共有することができた。なお、このミーティングは、毎晩行い、スタッフ・ボランティア間で情報を共有し、次の日の活動に活かすことを目指した。

（エピソード1）自学自習、生活習慣づくり！

学校生活を終え、参加者は交流の家に帰って来る。自習室に集まり、宿題や自主課題にそれぞれ取り組み、終わった人から隣の部屋で休憩するという生活リズムがルーティーン化される。初日、ある児童が算数プリントを未回答のまま「わからない。どうせできないから。」とランドセルに早々と片付けようとする姿が見られた。リーダーやボランティアがアドバイスしたり、班員に教えてもらったりする中で、部屋に一人残ることになっても粘り強く課題をやり遂げることができるようになり、学ぶ環境作りの大切さを感じるとともに、変容した姿をうれしく思った。

また、参加者は朝６時半に起床し、身支度を終えて朝食をとり７時２０分に交流の家を出発する。当然、交流の家では、自分のことは自分でしなくてはならない。３年生から５年生まで年齢差があり、一つの行動にかかる時間にも差が出てくる。初めのうちは遅れがちに行動していた児童も、班員に手助けしてもらったり、声をかけてもらったりしながら、日を追うごとに、時間を意識して次の行動に素早く取り掛かることができるようになった場面も見られた。

普段と違う生活環境の中で、寝食を共にする仲間や職員とのコミュニケーションや関わりの中で、一人一人が成長する様子を見ることができ、とても頼もしく感じた。

③　２日目　活動Ⅱ：　３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！

「活動Ⅱ：３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！」では、兵庫県立大学大学院　緑環境景観マネジメント研究科　准教授　嶽山　洋志　氏を講師に迎え、立体的な地図を作製し、地域の危険箇所を推測することで地域の安全・防災について考える機会をもった。段ボールに等高線の入った地図を仮止めし、１０ｍ毎に段ボールをカッターナイフ(デザインナイフ等)で切り取り、積み重ねて糊づけする作業を３班に分かれ、３地域の地図の完成を目指した。作業を進めていく中で、等高線の見方にも慣れ、作業の役割分担もできるようになり、活動時間終了まで全員が集中して取り組むことができた。

最終日には、自分たちの作った３Ｄハザードマップを見て、気が付いたことを発表し合い、平面の地図では分かりにくいことも、高低差の分かる３Ｄマップで確認をしながら、改めて危険個所についての理解を深めた。

（エピソード2）ボランティアとリーダー・小学生との絆

初参加の高校生と経験豊富な大学生の４名で運営に携わってもらった。小学生と年齢が近い高校生リーダーにとっては、具体的な声かけとそのタイミングで頭を悩ませていた。大学生ボランティアから「子どもたちの表情やつぶやきをよく観察すること」とアドバイスしてもらい、実際に関わる様子を見たり、ミーティングで不明な点を聞いたりしながら、次第に子どもたちとの信頼関係を構築することができるようになっていた。

また、ある児童は「ぼくも大学生になったら淡路に来て、うずしお交遊塾のボランティアをしたい」と決意を述べ、大学生ボランティアを感激させる一幕を見ることもでき、大学生がいいモデルとなって、次の世代にしっかりと絆をつないでくれていることを実感した。

④　３日目　活動Ⅲ：　防災サバイバルキャンプを体験してみよう！

「津波から命からがら逃れてきたが、水が引く気配もなく、大津波警報も解除されない。今ここにある物を使って野宿をする」という設定で「防災サバイバルキャンプ」を行った。与えられた用具や道具（竹、ブルーシート、PP ロープ、寝袋、ロールマット等）を用いてシェルターを作り、真冬の屋外で一晩を過ごす活動となる。シェルターを設置するためには「風をさける」「地面を掘りやすい場所」「平らな地面」という条件をクリアする必要がある。また子どもたちは、出入り口の個数や風向きなどの要素も加味し、安易な妥協や多数決ではなく、納得した上で合意形成していく姿が見られた。作業を始めてからは、初日のロープワークで学んだ「巻き結び」を駆使し、短時間で竹の骨組みを作り、ブルーシートをかけて完成させることができた。作業中、普段口数の少なかった児童も自然と会話がはずんだり、班で掛け声を合わせたりする姿も見られた。達成感からか、どの班のシェルターからも楽しそうに会話する声が夜遅くまで続いていた。

就寝前には健康観察と諸連絡を行った。自らの力で乗り切る覚悟をもたせることも大切だが、体調不良時にはログハウスに避難するよう注意を呼びかけた。気象台への安全確認、雷チェッカーや熱中症指標計の持参、天候が崩れそうな時や体調がすぐれない時はいつでもログハウスに避難できる万全の準備をした上で活動を実施したが、誰一人ログハウスで休むこともなく、元気にシェルター内で一夜を過ごすことができた。

（エピソード3）「やればできる！！」

「夜トイレに行くためには、入り口が二つあった方が動きやすい」「今、風はこっちから吹いている」「明りのある方に出入口を向けたら足元が見やすい」「木や建物が風を避けてくれるのでこの場所がいい」・・・それぞれの思いをどんどん意見にすることはできるが、うまくまとまらず、話し合いに１時間以上費やした班があった。「活動終了時間を考えた方がいい」職員の一言に、設置場所と出入口の向きを決めてようやく作業を開始した。時間内に完成することができるか心配されたが、自分たちで役割分担をし、手際よく巻き結びをしてあっという間に骨組みを作り完成させることができた。夜も更けて冷え込んでくる中、「やればできる！！」の合言葉を決め、全員が声をそろえてやる気を鼓舞しながら、集中して作業する一体感にはたくましささえ感じることができた。

⑤　４日目　活動Ⅳ・活動Ⅴ：　防災食を作ろう

起床後即席のコーンスープを飲んだ後の朝食は、「ライフラインが止まった状態でも、簡単に作れる」蒸しパン作りに取り組んだ。メタルマッチで火を起こし、お湯を沸かしてポリ袋に食材を入れたパッククッキングと呼ばれる方法で調理した。朝食はシェルター内で寒い一夜を明かした参加者の空腹を満たすとともに、災害時に使える様々なスキルを身に付けることができた。

昼食は「日持ちする食材で料理する」「洗い物を含め、使える水は6Ｌまで」「リーダーや職員に頼らず自分たちでやり遂げる」という条件が加わった。パッククッキングの調理法で、乾物や缶詰等の食材を使って親子丼と煮込みそうめんを作った。頼れるのはレシピとこれまでに築いてきた仲間との信頼感。火起こしから再スタートしたが、一瞬で火を付け、手際よく進めることができた。「何か手伝うことはない？」自分にできることを考え、自ら進んで先を見通して行動する姿が見られるようになってきた。また、紙を使って汚れを拭き取ったり、水を貯めて洗い物したりして水を節約するアイデアも生かされていた。

（エピソード4）みんなのためにできること、役割分担の大切さに気づく

朝食作りでは火起こしの役割を希望する者が多く、経験のある上級生が一方的に主導権を握る場面が見受けられた。短時間に火を付けて作業に取り掛かることができた半面、「自分も火を付けたいのにできなかった」と不満を残す参加者も数名いた。しかしながら、「リーダーに頼らず、自分たちでやり遂げる」昼食作りの場面では、自然と役割分担を納得するように譲り合ったり、他に自分にできることを考えて行動したりする場面が増えていった。したいことができなかった不満より、「役割分担をしたから早く作ることができた」と自分にできる仕事を見つけて責任を果たすことや、班のみんなのために役立つ喜びに気付くことができるようになっていたことに大きな成長を感じた。

⑥　４日目　活動Ⅵ・活動Ⅶ：　３Ｄハザードマップ・防災サバイバルキャンプをふりかえろう！

２日目に完成させた３Ｄハザードマップを見ながら、身近な地域の土地の高低差を確認したり、過去に被災した際の映像や写真の資料を視聴したりして、より身近なものとして災害への認識を深めた。特に、映像や写真を見る眼差しは真剣で、自分事として考えながら視聴している空気感を感じ取ることができた。

最後に３泊４日の活動を通して気づいたことや考えたことを振り返り、「一人でできなくても、みんなでやるとできる」「地震の時に、学んだことをお母さんに教えてあげたい」「地震や津波が来た時のために、避難しても大丈夫なように学べてよかった」などの感想を残した。今後、自分はもちろん友達や家族、地域の人の命を守れる行動がとれるように学び続けることを確認して全日程を終了した。

⑦　事後のふりかえり（高校生リーダーと大学生ボランティア）

時間を追うごとに、自分たちで考えて役割分担し、自発的に行動できるようになっていく日々の成長を全員で確認し合った。

初参加の高校生リーダーは、参加者目線だけでなく指導者としての立場で、信頼関係を構築していくことの大変さを感じたようであった。当初、「いつ、どう声かけしていいか難しい」と言っていたが、子どもと寝食を共にする中で、指導するべき場面や見守るべき場面によって立ち位置を変えて対応することができるようになっていた。

また、口出しし過ぎず子どもたちの自主性を尊重し待つことの大切さ、固定観念を捨てて子どもたちに接することの難しさ、子どもたちの成長を共に喜べることの楽しさ等を共有し、学校ではできない貴重な体験を今後にも活かしていこうとする前向きな意見が出ていた。

（エピソード5）「また来年きます！」

　最終日、昼食が終わり片づけをしている中で、「来年どうする？」「絶対参加する」「ぼくも」と再会を誓い合う声が聞こえていた。初日「親に勝手に申込されたから、仕方なく参加した」と言っていた子どもが「また来年きます！」と自信満々に前言撤回する発言をとてもうれしく思った。ほとんどの参加者から「来年も参加したい」との前向きな声を聞くことができた。

　今回、南淡中学校区から三原中学校区にエリアを広げて各地区から集まった参加者であったが、生活を共にし、協力して困難を乗り越えることでワンチームになったことを実感した。

１１　参加者の声

＜小学生の感想＞（事後アンケートより抜粋）

〇ごはんを作るのが楽しかった。
〇シェルターで寝るのが寒かったけど、楽しかった。
〇時間にきびしかったけど、間に合うことができた。

＜高校生リーダー・大学生ボランティアの感想＞（事後アンケートより抜粋）

〇すごくいい経験をさせてもらった。他の活動にもまた参加したい。
〇仲良くなるだけでは話を聞いてもらえないと感じた。もっと話を聞きたいと思ってもらえるようにしたい。
〇子どもたちへ口出しし過ぎないのが難しいので、ずっと意識していきたい。

１２　成果と課題

【アンケート調査票から】

　事業の総合評価では、「満足」「やや満足」と回答した小学生、高校生リーダーは94.7%という結果から、活動全般に満足していることがうかがえる。活動内容についても「満足」「やや満足」と答えた小学生、高校生リーダーは100%と、内容的にも高い満足度があったものと考える。

【通学型の合宿だからこそ見えるもの】

　通学型の合宿は、昼間は学校で勉強し、夕方交流の家に帰って来る。子どもたちにとっては、同じ屋根の下で暮らすもう一つの「家」で、いつもの学校や家庭とは違う仲間やリーダー・スタッフに支えられながら毎日を過ごす。日増しにその絆は深まり、時には寄り添い優しく声をかけたり、時には間違っていることに厳しく注意したりするなどする日々の様子は、成長を見守る第二の「家族」のようなものだと感じることができた。

　また、参加者が学校に行っている間に、スタッフ間でスケジュールの確認や問題点の修正ができることがこの事業の特徴である。運営側が情報を共有しサポート体制を作れたことは、参加者に安心感を与えられたのではないかと考える。生活面で、用具の使い方や片付け、偏食、身の回りの整理整頓等、気になることも見受けられたが、声かけすることで少しずつではあるが変容していく姿を見ることもできた。今後は、こうした学校では見ることのできない子どもたちの成長する様子を共有できる体制を整え、参加者のより良い支援の在り方について検討していけたらと考える。

【防災プログラムの活用】

◆「防災」への意識を高める体験活動

　「３Dハザードマップ作り」では、３グループで３地域のマップを作製した。同じ高さの等高線を同じ色でなぞる、線に沿ってパーツを切るなど役割分担し、長時間、最後まで集中して作業に取り組むことができた。時間内に完成させることが難しかったため、視覚的な作製手順の準備や作業の分量については検討が必要である。完成したハザードマップは、振り返りの場面で、立体地図だからこそ視覚的に理解できる良さを感じることができた。

　「防災サバイバルキャンプ」では、限られた道具を使って、寒空の下自分たちで作り上げたシェルターで一夜を過ごす活動であった。必要な知識と技術を活かし、仲間と協力しながら活動する必要があったが、どの参加者も自分のやるべき仕事を見つけて自主的に取り組み、みんなに感謝され役に立っている喜びを感じ取っている様子をうかがうことができた。また、寒さの厳しい状況で実施したからこそ、協力して真剣に取り組もうとする意欲、シェルターや食事完成時の大きな達成感に繋がったと考える。その醍醐味が「来年また来る」「参加して楽しかった」との感想にも通じていると推察する。

【望ましい人間関係の育成】

◆交流の家での活動を通して

　参加者は昨年の事業で共に過ごした友達や、社会体育のつながりという既存の人間関係もあったが、活動を通して班ごとに新たな

人間関係を構築していった。特に３Ｄハザードマップ作りや防災サバイバルキャンプでは、お互いが役割分担し、協力し合いながら完成に至ることができた。同じ目標に向かってみんなと力を合わせることの心地よさや、責任を果たし班員から感謝される喜びを味わっていたようであった。事業が終わる頃には、来年の再会を約束し合う姿も見られ、中１ギャップ解消という観点からも効果があったと思われる。

【より充実した事業にするために】

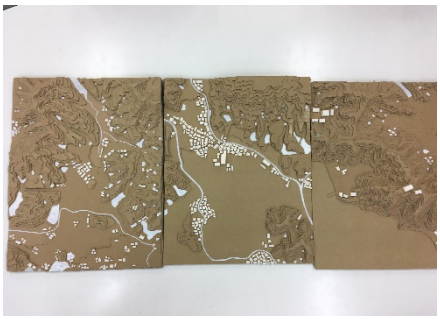
◆学校、関係諸機関等との連携

事業前、各学校に「うずしお交遊塾」のご紹介をさせていただき、本事業へのご支援・ご協力をお願いする機会をいただいた。事業中も、登下校時の安全面のことや登下校時刻についてご意見をいただき、通学路のパトロールやスケジュールの調整を行うことができた。

兵庫県立淡路三原高等学校、吉備国際大学には、４泊５日（高校生、大学生は事前研修で前日に１泊）という長期のボランティア活動でありながら、本事業への参加にご協力をいただいた。

３Ｄハザードマップ作りや最終日のふりかえりでは、外部講師を招き、防災を切り口にした本事業の趣旨に迫ることができた。

今後とも、各学校や関係諸機関等と連携し、事業内容について検討を重ね、中１ギャップ解消プログラム事業として、更に実用性・汎用性のあるプログラム内容となるよう改善していきたい。



主　催　　国立淡路青少年交流の家
〒656-0543　兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39
TEL 0799-55-2696　FAX 0799-55-0463
http://awaji.niye.go.jp/hp/

体験の風をおこそう